

Ceftriaxone (Ro 13-9904) の臨床的検討

田村正和・後東俊博・滝下佳寛・蝶良英郎

徳島大学医学部第3内科

要 旨

新しいセフェム系抗生剤である ceftriaxone (CTRX, Ro 13-9904) を内科的感染症 8 例に投与し、その臨床的効果、副作用について検討したので報告する。

対象は呼吸器感染症 5 例、尿路感染症 2 例、敗血症疑い 1 例で、いずれも気管支喘息、肺癌等何らかの基礎疾患を有する症例である。投与は、1 日 2 ～ 4 g、6 日から 18 日間 one shot 静注した。臨床効果の判定は、総合判断により、著効、有効、無効、および不明の 4 段階にて行った。

臨床効果の内訳は、呼吸器感染症 5 例中、著効 2 例、有効 1 例、無効 1 例、不明 1 例、尿路感染症 2 例中、有効 2 例、敗血症疑いの 1 例は無効であった。全症例 8 例中、不明 1 例を除き、著効、有効を含めた有効率は 71.4% であった。起炎菌と本剤との関係は少数例のため明らかにはされなかったが、比較的広い抗菌スペクトラムを有することが示唆された。副作用については、アレルギー症状、消化器症状等は全例ともみられなかったが、1 例に軽度の S-GOT、S-GPT の上昇、1 例に軽度好酸球増多がみられたが、いずれも中止後速やかに消失した。

以上より、本剤 CTRX は各種感染症に対して有用な抗生剤と考える。

Ceftriaxone (CTRX, Ro 13-9904) は、スイス、エフ・ホフマン・ラ・ロシュ社で開発された、セファロsporin 系注射用抗生剤である。本剤は、抗菌スペクトラムが広域であり、*E. coli*, *K. pneumoniae*, *P. mirabilis*, *S. marcescens*, *H. influenzae* に強い抗菌活性を有するとされている。また、*in vitro* よりも *in vivo* 効果が秀れているとされている。我々は、今回、内科的疾患 8 例に本剤を投与し、その臨床効果、細菌学的効果、および副作用について検討する機会を得たので報告する。

I. 対象患者および投与方法

対象患者は、昭和 56 年 12 月から 57 年 6 月までの間に徳島大学第 3 内科に入院した感染症 8 例で、いずれも基礎疾患を有する 29 歳から 77 歳までの成人、男性 5 例、女性 3 例であった。感染部位では、呼吸器感染症 5 例、尿路感染症 2 例、敗血症疑い 1 例であった。基礎疾患は、一酸化炭素中毒、自己免疫性溶血性貧血、気管支拡張症、肺癌、悪性胸腺腫、気管支喘息、polyarteritis nodosa, inflammatory fibrous histiocytoma 各 1 例であった。

投与方法は各例とも、1 回 1 ～ 2 g を生理食塩水 20 ml に溶解し、1 日 2 回 one shot 静注した。投与期間は 6 日から 18 日間であり、総投与量は 12g から 36g であった。臨床効果の判定は、自覚症状、他覚的所見、細菌学のおよ

び臨床検査成績等より総合判断し、著効 (excellent)、有効 (good)、無効 (poor)、不明 (not determined) の 4 段階に分類した。

II. 成績

成績は Table 1 に示すごとく、著効 2 例、有効 3 例、無効 2 例、不明 1 例であった。疾患別では、呼吸器感染症 5 例中、著効 2 例、有効 1 例、無効 1 例、不明 1 例であり、尿路感染症 2 例中有効 2 例、敗血症疑いの 1 例は無効であった。起炎菌の検出されたものは、呼吸器感染症 3 例、尿路感染症 1 例で、分離菌別では、*C. freundii*, *Serratia*, *P. morgani*, *H. influenzae*, *K. oxytoca* が各 1 例、*S. pneumoniae* が 2 例であったが、2 種以上の複数菌感染が、呼吸器感染症 2 例にみられた。

症例 2 は、発熱を主訴とし来院した症例で胸部写真上、肺気腫を示し、また、軽度の咳嗽、喀痰を認めるため、慢性気管支炎の急性増悪として本剤を計 33g 投与した。発熱は持続しさらに抗生剤変更にても解熱は得られなかった。経過中、脳内出血を併発し死亡する。死亡後、剖検により polyarteritis nodosa と診断されたため、発熱は原疾患によるものと考えられ、効果判定は不明とした。

症例 5 は、悪性胸腺腫の診断のもとにステロイド使用

Table 1 Clinical result of CTRX

Case No.	Name (Sex) Age	Diagnosis (Underlying disease)	Isolated organism	CTRX g × days (Total, g) Route	Clinical effect	Side effect
1	Y.M. (F) 50	Cystitis (Autoimmune hemolytic anemia)	<i>C. freundii</i> ↓ (-)	2 × 8 (16) I.V.	+	-
2	K.G. (M) 64	Chronic bronchitis (Polyarteritis nodosa)	Normal flora	1 × 1 2 × 4 4 × 6 (33) I.V.	ND	-
3	Y.S. (F) 29	Chronic bronchitis (Bronchiectasis)	Normal flora	2 × 18 (36) I.V.	++	Eosinophilia 42/cmm → 308/cmm
4	I.M. (M) 77	Bronchopneumonia (Lung cancer)	<i>Serratia</i> <i>P. morgani</i>	1 × 1 2 × 7 (15) I.V.	+	-
5	T.O. (M) 52	Bronchopneumonia (Malignant thymoma with lung metastasis)	<i>H. influenzae</i> <i>S. pneumoniae</i> <i>K. oxytoca</i>	4 × 7 (28) I.V.	-	-
6	T.S. (M) 64	Sepsis susp. (Inflammatory fibrous histiocytoma)		2 × 5 4 × 2 (18) I.V.	-	-
7	K.K. (F) 58	Bronchopneumonia (Bronchial asthma)	<i>S. pneumoniae</i> ↓ (-)	2 × 6 (12) I.V.	++	-
8	T.M. (M) 49	Pyelonephritis susp. (Carbon monoxide poisoning)	?	2 × 9 (18) I.V.	+	GOT 43 → 61 GPT 37 → 68

++ : Excellent, + : Good, - : Poor, ND : Not determined

中、咳嗽、喀痰および発熱を認め、気管支肺炎と診断し、本剤1日4g、7日間投与するも症状の改善を認めず、後にAB-PCに抗生剤変更後解熱を得たため、無効とした。

症例6は、腹部腫瘍を主訴として来院し、経過中より発熱を来とし、敗血症を疑い本剤1日2gを5日間、さらに4gを2日間投与するも解熱が得られず、CMZ、LCMに変更後解熱が得られたため、無効とした。

副作用については、全例に認めなかった。臨床検査成績上、症例3において、軽度の好酸球増多、および症例8において、軽度のS-GOT、S-GPTの上昇を認めたが、投与中止後速やかに消失した。

III. 考 察

今回、我々はCTRXを8例に投与した。いずれの症例

も基礎疾患を有していた。臨床効果は、著効2例、有効3例、無効2例、不明1例、著効、有効を含めた有効率は、不明1例を除き、7例中5例、71.4%であった。無効症例はいずれも悪性腫瘍を合併していた。起炎菌との関係は、症例数が少ないため、明らかにすることはできなかったが、比較的広い抗菌スペクトラムを有することが推定された。

以上のことより、副作用に十分注意して用いれば、各種感染症に対し、有用な抗生物質であると考えられる。

文 献

- 1) 第29回日本化学療法学会東日本支部総会、新薬シンポジウム、Ceftriaxone (Ro 13-9904)、仙台、1982

CLINICAL STUDIES ON CEFTRIAZONE (Ro 13-9904)

MASAKAZU TAMURA, TOSHIHIRO GOTO, YOSHIHIRO TAKISHITA and EIRO TSUBURA
3rd Department of Internal Medicine,
School of Medicine, Tokushima University

The clinical effects of ceftriazone (CTRX, Ro 13-9904), a new cephalosporin antibiotic, was studied in eight cases.

All of the patients were having various kinds of underlying diseases. Clinical efficacy was observed in 3 out of 5 cases with respiratory tract infection, and in 2 out of 2 cases with urinary tract infection. Two cases of poor efficacy were having malignant tumor for underlying disease. One case was not determined.

The total efficacy rate was 71.4%. No side effect was observed. An eosinophilia and an elevation of transaminase were observed. However these two patients complained of no subjective symptoms. These laboratory abnormalities were alleviated rapidly following cessation of the therapy.